効果的な〈場〉づくりをめざして

元気な地域づくりのカギとして、地域の人びとがつながり、新しい活動を生み出す拠点としての〈場〉が注目されている。しかし単に〈場〉を作っただけで何かが生まれるわけではない。効果的な〈場〉を作っていくために欠かせない視点についておまとめいただいた。

慶應義塾大学SFC研究所所長・総合政策学部教授
飯盛義徳

場づくりが求められる背景

持続可能な地域づくりには、効果的なプラットフォームをいかに設計するかが大切であると思っています。プラットフォームを作ることで、地域内外の人びとの新しいつながりができてきたり、あるいは地域の人びとの主体的な活動が生まれることにつながっていくと考えています。

今回のテーマは〈場〉づくりですが、私はこのプラットフォームの概念が、効果的な場づくりに役立つと考えていて、それがコミュニティの担い手の確保や育成につながっていくと思っています。

いま農村部では近代化の進展とともに、かつては存在していた講や結、寄り合いといった地縁をベースとした相互扶助による地域の問題解決の場が失われつつあります。また都市部でも、それまで地域づくりを担ってきたような自営業者が減ってきて、人口の流入によって人びとのつながりも希薄化し、農村でも都市でもコミュニティが危機に瀕しているという現実があります。

ここでイタリアのシエナという街の中心部にある広場の写真（**写真1**）を見てください。何度か調査に行っているのですが、広場の周囲には市役所や教会があって、カフェやレストランが並んでいて、ここにくれば必ず知り合いに会えるということで、いつもいろんな人が集まっています。年に二回、パリオという自治会対抗の馬のレースが行われたりもします。都市にこういう装置があることで人と人との交流は生まれてくるのですが、日本にはこうした場所がそんなに多くないのではという問題意識を以前から持っていました。

「地域づくり」というものを私なりに定義しますと、地域のさまざまな課題解決を行う具体的な活動といえると思います。そして場というのは、人びとが集まって相互作用を行う枠組みや空間のことをいい、建造物の有無ということにはあまりこだわらないという定義付けをしています。オルデンバーグのいう、家でもない、職場でもないサードプレイスとほぼ同じ意味かなとも思っています。[*1]

こうした場が、地域づくりにおいて新しいつながりを生み出し、相互作用によって課題解決につながるということで、いま注目を集めているわけですね。

プラットフォームという概念

とはいえ、場をつくったからといってすべてがうまくいくわけではありません。効果的な場をどうやってつくり、運営していけばいいのか。これが私たちの次の課題だろうと思います。

地域づくりの活動でめざすべきことは、次々と新しい自発的な活動が生まれること、つまり社会的創発※イノベーションが起こることなのですが、そうした成果が出るまでには時間がかかります。多様な居住者がいるわけですから、さまざまな人たちの参画も大切です。

それゆえに私はプラットフォームという概念に注目しているわけです。プラットフォームとは、一言でいえばさまざまな人たちの協働を促進するコミュニケーションの基盤といえるでしょう。この設計を上手に行うことで、さまざまな人たちが集まり、相互作用が活発になって、創発、つまり予期もしないような活動が生まれてくる。つまり地域づくりというのは効果的なプラットフォーム設計とも置き換えられるのではないかと考えています。

では効果的なプラットフォーム設計とはどういうものか。三

写真1◉イタリア・シエナの中心部にある広場。日本にはあまりこうした場がない。

いさがい・よしのり
佐賀県佐賀市生まれ。慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程単位取得退学、博士（経営学）。松下電器産業㈱勤務などを経て、二〇一四年から現職。専門はプラットフォームデザイン、地域づくり、ファミリービジネスマネジメントなど。主著に『場づくりから始める地域づくり』（学芸出版社、二〇一二年）、『地域づくりのプラットフォーム』（学芸出版社、二〇一五）、『社会イノベータ』（慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）など多数。